日本人の心の歴史　神道

日本人の心の歴史 補遺

唐木順三

筑摩書房

日本人の心の歴史 補遺

唐木順三
からきじゅんぞう

1904年長野縣に生まれる。1927年京都大學哲學科卒。評論家。主著「鷗外の精神」「中世の文學」「千利休」「無用者の系譜」「無常」「三木清」「日本の心」他。尙「唐木順三全集」全12卷がある。

昭和47年2月25日　初版第1刷發行
昭和47年6月15日　初版第2刷發行

著　者　©唐　木　順　三
發行者　井　上　達　三
發行所　筑　摩　書　房
東京都千代田區神田小川町2—8
Tel (291) 7651　振替東京 4123
郵便番號 101—91

印刷　精興社　　製本　矢嶋製本

(分類)1021(製品)82039(出版社)4604

目次

一　「秋萩帖」と「山家秋歌」……三
二　和泉式部の季節……二
三　日蓮の冬の手紙……四九
四　白と影
——永福門院のこと——……七一
五　『撰集抄』の脱體制者たち……七九
——その歴史的敍述——

六　梅宮覺書……一二九
七　文智尼と一絲文守、並びにその周邊……一四五
——「梅宮覺書」附記——
八　桂御所の問題點……一八九
九　永井荷風……二〇九
——『濹東綺譚』まで——
一〇　梶井基次郎の風物……二三四
あとがき……二五三
再版にあたつて……二五五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

日本人の心の歴史　補遺

一　「秋萩帖」と「山家秋歌」

「秋萩帖」は古來手習ひのお手本として用ゐられてゐた。良寛も懷素自敍帖とともにそれを手本にした。多くの木版本が流布してゐて、私もかつて一册を購つたが、まがひもまたまがひの代物で、ただ私はその書體を知りたかつたのである。手習ひのお手本とされたのは、小野道風の筆と言ひならされてきたからであらう。

この「秋萩帖」について瀧井孝作氏が、ゆきとどいた詳しい紹介を昭和四十一年の『心』の十一月號に書いてゐる。この帖は國文學者がつとにとりあげて然るべきものと思ふのだが、その筋からではなく、瀧井氏のやうな人によつて考證や鑑賞や推定がされてゐることは、なかなかに興味ぶかい。

瀧井氏は何年か前に根津美術館で「秋萩帖」の實物を見た。この帖に收められた歌は全部で四十八首。その第一紙は麻紙、第二紙以下は楮紙だが、その楮紙の部分は卷本淮南子（えなんじ）の裏に書かれたもので、第一紙とは手跡も違ふといふ。瀧井氏は實物をみてさまざまな疑問を抱き、上野の博

物館に『平安朝傳來の白氏文集と三蹟の研究』といふ大著の作者小松茂美氏を訪ねる。小松氏の鑑定では麻紙の第一紙の筆跡は、小野道風を少し遡つた時代のものだらうといふ。そして第二紙以下が淮南子の裏を利用してゐることから、その筆者はよほど高貴の出の人ではなかつたかと話す。この淮南子は奈良朝期の寫本で當時は珍重されたものであつた筈だから、それを反古か何かのやうに使ふのは高貴の趣味人でなければかなはぬことであつたといふのである。

瀧井氏は右のやうな小松氏の言葉や、また自分の實感から推定して、「秋萩帖」の歌は萬葉集と古今集の間のものではないかといふ。私もその考へに贊成する。

この帖に載せられた四十八首の歌には、いづれもその作者の名は入れられてゐない。若し「秋萩帖」の筆者が歌人であつたならば、作歌者の名前を書く筈だから、恐らく歌人ではなかつたのではないか。編者はこれらの歌を常に口づさんでゐたのであらう、古歌も名歌も自分の歌であるかのやうに身についたものになつてゐて、それを思ひつくままに誌したのではないかと瀧井氏はいふ。また四十八首、いづれも淋しい歌ばかりが選ばれてゐるところから、その筆者は、冷え寂びた聖のやうな心境の人ではなかつたかともいふ。

さて「秋萩帖」四十八首の中から、いくつかを選んでみよう。

第一紙の歌

秋萩の下葉色づくいまよりぞ獨りある人の寢がてにする

これは古今集卷第四秋歌上に讀人しらずとして載せられてゐるが、古今集では「いまよりぞ」が「今よりや」となつてゐる。私は「や」よりも「ぞ」をとる。「ぞ」の方が強く、實感がある。

第二紙以下の歌から、

秋果てて霜になりにし我なれば散る言の葉を何か恨みむ

物思ふと獨りしも我が起きつれば海邊の田鶴も夜半に鳴くなり

この「我」にはやはり實感がある。古今調からいへば野暮かもしれぬが、私はこの實感を尊重する。

風をいたみ沖つ白波高からし釣する海人の袖反る見ゆ

これは萬葉集卷三の雜歌の部の角麿の歌四首のうちの一つと似てゐる（萬葉二九四）。いま岩波古典大系本によつて寫せば、

風を疾み沖つ白波高からし海人の釣船濱に歸りぬ

また萬葉集卷九（一七一五）に次の歌がある。

樂浪の比良山風の海吹けば釣する海人の袖かへる見ゆ

「秋萩帖」の筆者は卷三の歌の前句と、卷九の歌の後句をしらずしらずにつなぎ合せて唱ふやうになつたのであらう。

神無月我が身嵐の吹く里は言の葉さへぞ移ろひにける

これは古今集卷第十五戀歌五の小野小町の「今はとてわが身時雨にふりぬれば言のはさへにう

つろひにけり」に似てゐる。小町の歌は例によつて、「時雨にふりぬ」にわが身の古りをかけてのしやれがある。言の葉、口約束をたがへたのはわが戀の相手である。「秋萩帖」の方は「我が身」が嵐の中に立つてゐる。言の葉の移ろつたのは世間一般かもしれぬが、また同時にその移ろひにわが身の移ろひを感じてゐる。

霜の上に跡踏みとむる濱千鳥行方も無しと佗びつつぞ經る

瀧井氏はこれは新古今集卷第十一戀歌一の藤原興風の歌、「霜の上に跡ふみつくる濱千鳥行方も無しと音をのみぞなく」の原歌であらうといふ。「音をのみぞなく」よりも「佗びつつぞ經る」の方が直接的である。

「秋萩帖」にだけあつて、他の歌集に出てゐないもの、その類歌のないものも多い。

物思ふとひとりしもわが起きつれば海邊の鶴も夜半に鳴くなり

世の中にあらむ方無み騷げばや心浮草寄る邊定めぬ

これらの歌にも實感がこもつてゐる。作者自身がさういふ生活をし、さういふ思ひに浸つてゐたらうと思はれる。

小松氏は「秋萩帖」第一紙の筆跡は小野道風以前のものであらうといふ。瀧井氏はこの帖の歌は萬葉と古今との間の時代のものではないかといふ。

「秋萩帖」の作者は誰か。淮南子を反古にして、その裏に歌をかきつらねていつたのは誰か。淋

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

しく佗しい歌、殊に蕭々の秋の歌を多くうたひ、あつめ、その帖の名に「秋萩」とつけたのは誰か。瀧井氏は歌人ではないだらうといふ。小松氏は高貴の出の人であらうといふ。いま誰と決定することは誰にもできないが、然しこのやうな書帖が編まれ、小野道風の筆といはれて珍重され、多くの人がそれを手本にして手習ひをしたことは事實である。

「秋萩の下葉色づくいまよりぞ」「秋果てて霜になりにし我なれば」「神無月我が身嵐の吹く里は」などの歌を思ふとき、この編・作者は失意落魄の人のやうにみえる。

みよしのの山の白雪ふみわけて入りにし人のおとづれもせぬ

これは古今集卷第六冬歌の部に壬生忠岑の歌として出てゐるものである。これを書帖にかいた筆者は、この感じをわがものとして、唱つてゐるやうに思はれる。

然りとてそむかれなくに事しあれば先歎かるるあな憂世の中

これは古今集卷第十八雜歌の下に、小野篁の歌として出てゐるものだが、古今集では「まづなげかれぬ」となつてゐる。「まづ歎かるる」の方が體驗的である。體驗的であるといふのは、作者或ひは筆者が、この歌の境に近いところにあるといふことである。

在原業平も失意の人、落魄の人であつたが、業平はその失意においてなほ軒昂、落魄において輝かしかつた。體貌閑麗、放縱不拘といふところがあつた。少くとも世人からさう思はれてゐた。「世の中に絶えて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし」「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身一つはもとの身にして」。業平の身邊にはなんとなく春の色香がただよつてゐる。伊勢物語の

「むかしをとこ」は業平だといはれてゐるが、例の「業平あづま下り」の段に誌されてゐる、「京にありわびて」「京や住み憂かりけむ」「身をえうなき者に思ひなして」においては、ありわび、住み憂く、身を役なきものと思ひこんだ人物として描かれてゐるが、そこには「わび」のもつ寂寞さは無い。惜春の情はあるが秋霜の白さはない。

「秋萩帖」の編・作者は落魄において孤獨であつた。鋭い感覺と纖細な審美眼をもちながら世間の表へ出ることをしなかつた。或ひはそれを嫌つた。淮南子を所持するからには相當の學識もあつたらう。或ひは學識の家系に生れたであらう。然しその淮南子を反古にしてその裏に己が孤獨の感懷を書きつらねるといふやうな人であつた。私はかういふ時代にかういふ人物が出たことをおもしろいと思ふ。

岩波古典文學大系の漢詩文の集（六十九卷）の中の『本朝文粹』をぱらぱらとめくつてゆく中、紀納言（長谷雄）の「山家秋歌」の數篇にゆきあたつた。これは興味深い。いま煩を避けて、大系本にしたがつて五、六を讀みくだしで寫す。

一身漂泊して浮名を厭ひ、試みに避る喧々たる毀譽の聲。秋水冷しく、暮山清し。三間の茅屋殘生を送る。

空山幽靜にして水潺湲たり、獨り雲中に臥して年を限らず。世夢を休め、塵緣を斷つ。苺苔

唯展ぶるのみ坐禪の筵。

居を山水に卜ひ心機を息め、人間に是非を駁することを屑しとせず。澗戸を扃し、松扉を掩ふ。秋寒くして只納るるのみ蓽蘿の衣。

登臨す南北に又東西に、本自幽人栖を定めず。秋鶴老い、暮猿啼く。交を結びて留宿す舊青溪。

吾が家は嶺の外、江の干に枕み、浪響松聲日夜寒し。老の至らむことを忘れ、身の安きを計る。閑に乘りて空しく把る一魚の竿。

寂寞たる山家秋晩の暉、門前の紅葉掃ふ人稀なり。長住に甘ひ、不歸を誓ふ。只聽く泉聲の枕上に飛ぶを。

夏の滯在先にゐる私は、右の作者紀長谷雄について尋ぬべき資料をもたない。古典大系本の註と日本文學小辭典等によつてわかるところを誌せば次の如し。

紀長谷雄（承和十二年〔八四五〕—延喜十二年〔九一二〕）は漢學者にして歌人。紀貞範の子。古今集の眞名序を書いた紀淑望の父である。或ひは淑望を長谷雄の甥としてゐるものもある。は

じめ大藏善行について學業を受け、貞觀十八年（八七六）に文章生となる。ついで菅原道眞の門に學び、文章得業生となる。寛平二年（八九〇）に圖書頭、その次の年に文章博士。延喜二年（九〇二）參議、やがて從三位、中納言に任ぜらる。六十八歳を以つて歿す。またその間、讃岐守、大學頭などを歴任す。文藻に富み、當時の詔書、また表、牒など、この人の手に成つたものが多いといふ。

紀長谷雄（中納言）の歌は後撰集に載つてゐて、それにはなかなかにおもしろいいきさつがある。長谷雄の歌は朱雀院の兵部卿の皇子（みこ）への返歌である。兵部卿の皇子の歌には、「あひしりて侍（はべ）りける人のいへにまかりけるに、梅の木侍けり。この花さきなんとき、かならずせうそこ（消息）せんといひけるを、をとなく侍ければ」といふまへがきがあつて、その歌

うめの花いまはさかりになりぬらんたのめしひとのをとづれもせぬ

それに對する長谷雄の返し

春風にいかにぞ梅やにほふらんわがみる枝はいろもかはらず

この歌は中納言に昇進した以後のものらしい。作者名を「中納言紀長谷雄」とした一本があるらしく、それから判斷してさうではないかと思はれる。

私は小辭典等によつて紀長谷雄の履歴をみたかぎりでは、なぜ前記の「山家秋歌」のやうな隱逸の詩を作つたのだらうか、「浮名を厭ひ」とか、「世夢を休（や）め、塵緣を斷つ」とか、或ひはなぜみづからを「幽人」といつたのか、想像ができなかつた。位も地位もともに順當にすすみ、なぜ

世を厭ふにいたつたのかの理解に苦しんだ。そして後撰集の右のいきさつを知つて、この作者の中に、なにか世をすねた心があることを知つた。「朱雀院の兵部卿のみこ」が具體的に誰であつたかはいまわかりかねるが、恐らく若い皇子であつたらう。長谷雄の邸宅にたまたまこの皇子が訪れて、そこに梅の木が多くあるのを見た。花の盛りの頃は必ず便りを差上げませうほどにと主からいはれて歸つた。ところで世間の梅が盛りなのに一向に消息がない。催促の歌を出すと、その返事は、私の家の梅の枝はもとのままで、いろもかはつてゐませんといふ、まことにつつけんどんで無愛想なものである。たかだかの中納言が皇子に對する御答へとしては禮を失してゐるとも思はれる。長谷雄の氣質の中に元來さういふものがあつたのだらうか。それとも時事によつてさうなつたのだらうか。

時事で或ひはと思ひあはされるのは、當時右大臣の菅原道眞が左大臣の藤原時平の讒によつて大宰府の權帥に貶せられ、大學頭であつた菅原高視が左遷されたのが延喜元年（九〇一）であつたことである。長谷雄は道眞から『菅家後集』（大宰府時代の詩文集）を託されたと、小辭典にあるから、よほど道眞に信頼されてゐたのであらう。宇多天皇の寛平六年（八九四）に遣唐使派遣の議があり、道眞が大使に、長谷雄が副使に任ぜられたが、やがて遣唐使廢止の命が出て行はれなかつたといふいきさつもあつた。道眞が配所で歿したのは延喜三年（九〇三）である。長谷雄が「山家秋歌」の示してゐる心境にいたつたのは、道眞の左遷や死と、多少は關りがあるかもしれない。

「秋水冷しく、暮山清し。三間の茅屋殘生を送る」「空山幽靜にして水潺湲たり」「閑に乘りて空しく把る一魚の竿」。これらの詩句には唐の詩人たち、就中白樂天などの影響があることは諸註釋書が誌してゐる。漢詩、唐詩の模倣であることは、既にその形式が示してゐることで異とするに足りない。然し前記のやうな詩句はその作者の實感をふくんでゐると、それを讀む者に感ぜしめる。卽ちそれはまさに詩である。作者の紀長谷雄は醍醐天皇の延喜十二年に歿してゐる。古今集は天皇の命によつて、延喜五年（九〇五）に撰集されてゐる。漢詩に代つて和歌が公式の席で隆盛になつて來た頃で、これもひとつの文化革新の時代であつた。菅原道眞門下の俊足、文章博士、大學頭であつた長谷雄は、この時代の波をまともにかぶつたかもしれない。

『本朝文粹』に載せた作品は合計四二七篇、作者は約七十人。作者は弘仁期（八一〇以後）から長元期（一〇三六まで）の二百十餘年間にわたつてゐる。中、十篇以上の作者は十一人。紀長谷雄からは三十七篇が採られてゐる。數からいつて、ベスト・スリイに入るだらう。そしてこの場合、數は質に準じてゐると思はれる。卽ち長谷雄は平安初期の有數の詩人であつた。

既に誌したやうに長谷雄には一種の癖があつたと思はれる。或ひは僻と書いた方が適當かもしれない。「山家秋歌」も隱逸癖或ひは僻を示してゐるのかもしれない。そしてこの癖は『本朝文粹』所載の慶滋保胤（よししげのやすたね）の「池亭記」（九八二）に通じ、やがて鴨長明の『方丈記』（一二一二）に通じてゐる。ただ相異をいへば、保胤や長明が念佛の對象として彌陀像を庵內に安置したのに對し、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com